

バリ島における祭礼の仕組み

－アジアの祝祭文化の比較研究－

THE STRUCTURE OF BALINESE FESTIVALS Comparative Study of Festival Culture in Asia

今村 文彦 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授

Fumihiko IMAMURA Department of Visual Design, School of Design, Professor

要旨

アジア各地の祭礼は、多様な文化的伝統を背景に、多彩な表現形態をもっている。とくに山車は、多様な造形性のみならず、豊穡な象徴性を持ち、アジアの世界観や造形観を理解するには不可欠である。本報告は、祭礼の実態把握を目的に、インドネシアのバリ島で2010年6月から9月まで実施した予備的な調査から寺院祭礼(オダラン)、火葬儀礼について、中心となる象徴物が、宗教的信仰、世界観、伝統社会とどのように関連しているかについて概括的に検討するものである。

寺院祭礼は、神の降臨と慰撫という明確な基本構造のうえに成立し、決して揺るがない。したがって、芸能や音楽の位置づけも原初的な意味あいの有効性を失っていない。そこに社会的な求心力の宗教的源泉があると思われる。

火葬儀礼は、バリの世界観と社会構造が反映されている。とくに仮装行列に曳きだされる火葬塔バデと火葬棺にはカーストや社会的地位によって、大きさや種類が厳格に規定され、その規模も異なる。また、天界、地上、地下世界からなるというバリの世界観は、バデの構造にも見られる。

バリの祭礼の根底には、聖/俗、天/地などの二元論的な対立と共存が存在し、その均衡が希求されている。

Summary

There are a wide variety of festivals in each Asian countries, which have rich and significant cultural traditions as their background. Especially marching floats (“dashi” in Japanese) that have not only various unique forms, but abundant symbolic meanings, are essential for understanding the Asian cosmology and their expressiveness.

This report is based on my primary research at Bali, Indonesia from June to September 2010, aiming to grasp actual conditions of festivals including temple festivals “odalan” and cremation ceremonies, and focusing the relationship of symbols such as cremation tower “bade” with religious belief, cosmology, and social system.

From my research, I found opposition and coexistence in symbolic dichotomy such as sacred/profane, heaven/earth in Balinese festivals, and harmony and balance between them are most longed for.

第1章 はじめに

アジアの各地域で繰り広げられている祭礼（祝祭）は、多様な文化的伝統を背景に、多彩な表現形態をもっている。とくに山車は、その多様で独自の造形性のみならず、豊饒な象徴性をもち、アジアの世界観や造形観を理解するには不可欠である。本研究は、山車を中心とする祭礼について、造形、デザイン、祭礼の仕組みや空間とのかかわりなど祭礼（祝祭）をめぐるヒト、モノ、コトを複合的に関連づけて、アジアにおける祭礼（祝祭）文化を総合的に明らかにすることを目的としている。ここでは、祭礼の実態把握を目的に実施した予備的な調査（2010年6月～9月）から、代表的な象徴、構造物のもつ意味や役割について、宗教的信仰、世界観、伝統社会との関わりを含めて、概括的な報告をおこなう。調査対象は、オダラン（odalan）と呼ばれる寺院祭礼、火葬儀礼（ngaben）である。

バリ島は人口約389万人のうち約90%近くがヒンドゥー教徒で、伝統的な慣習（アダット）に基づく生活を営んでいる。インドに由来するヒンドゥー教が14世紀にジャワから入ったが、地元のアニミズムや在来信仰と習合し、独自の宗教的世界と生活習慣をつくりあげてきた。しかし、バリの宗教では教義や経典よりも、生活と密接に結びついた実践が重視され、デサ（行政村）やバンジャール（バリ南部にみられるデサの下位組織、地域共同体）、家を維持していくうえでの生活規範としての側面が強い。したがって、祭礼や儀礼も日常生活の延長線上にあり、毎日、家や店の前の供犠、礼拝がおこなわれ、それは祭礼や儀礼においても基本的に変わらない。



写真1. 宝物を載せて巡回する

第2章 寺院祭礼

バリには数多くの寺院が存在する。その中心となるのが、デサ（行政村）の3つの寺院で、村の開発先祖を祀るプラ・プセ（Pura Puseh）、村の諸活動の中心であるプラ・デサ（Pura Desa）、

そして死者のための寺院で、墓地も近くにあるプラ・ダルム（Pura Dalem）である。

バリの寺院は、基本的に屋根のない開放的な劇場である。祭祀されるべき神は常在せず、特別の機会に天界から降臨し、鎮座する。したがって、普段の日は寺院は閑散としていて、誰もいない。オダランになると、鎮座した神々を慰撫するための芸能や演劇の舞台となるのである。

ここでは、バリの州都デンパサール西郊に位置するタンジュン・ブンカ（Tanjung Bunkak）のオダランについてみていくことにする。2010年のオダランは、8月25日から9月1日までの1週間にわたっておこなわれた（映像1）。例年は3日間で毎晩の祈祷だけが、20年ぶりの大祭となったため、毎晩、さまざまな舞踊や芸能が奉納された。オダランは、210日周期のウク暦に基づいて、1年に1回開催される。

8月25日は、昼間に女性によって供物が寺院に運ばれた。午後7時くらいから人びとが正装して集まりだす。寺院では、持参してきたチャナン・サリ（供物のエッセンス）で簡単な祈祷をおこない、司祭らに聖水をかけてもらう。最後に洗米を額につける。午後9時くらいから、寺院の中は人であふれかえり、司祭による祈祷が始まる。終わると、参加者に聖水をかけて回る。祈祷が終わると、寺院の宝物、神像、パロン、ランダ、ジェロ・グデなどの人形や仮面、竜（ナーガ）の作り物、奉納された供物などが頭上に担がれ、行列して左回りに回る（写真1）。午後10時頃に、司祭らが神の降臨を願うための祈祷をする。翌日以降は、毎日朝の祈祷があり、人びとはそれぞれ参拝する。夜に



写真2. チャロナラン 軽妙な役者の掛け合いが続き、時に役者は観客を大いに笑わせる



写真3. 最後に町中を行列する

はチャロナラン(写真2)や影絵芝居ワヤン・クリなどの舞踊や芸能が奉納された。最終日の9月1日は、午後から奉納された供物や寺院の宝物、神像、パロン、ランダなどが隊列を組んで、市内を行列して歩き、祭礼を終えた(写真3)。

オダランとは、オダルに由来し、神が出てくることを意味する。寺院祭礼は、神の降臨と慰撫という明確な基本構造のうえに成立し、決して揺るがない。したがって、芸能や音楽の位置づけも原初的な意味あいの有効性を失っていない。そこに社会的な求心力の宗教的源泉があると思われる。

第3章 火葬儀礼

バリ島の火葬儀礼は、日本の葬儀とは様相がまったく異なり、遺族の悲しみや悲哀よりも祝福や喜びといった雰囲気に含まれている。

バリの火葬を理解するためには、死生観について知る必要がある。バリでは肉体は靈魂を容れる器とされ、死において火葬儀礼を受けることができれば、肉体から離脱して靈魂は天界に赴くことができる。ただ



写真4. バデ



写真5. 牛型の火葬棺



写真6. 火葬に付される

し、儀礼は吉日の選定など複雑な手順を経る必要があり、多額の経費を要するために、高位のカースト以外はずぐには火葬にせず、共同墓地に土葬される。何年後かに掘り出した遺骨を火葬に付すのである。また、合同で火葬をおこなうことも増えた。実際にバリ東部のパダンバイ(Padangbai)で見た火葬では、亡くなった弁護士の遺体とともに70名近くの骨が掘りだされ、いっしょに火葬された(映像2)。

葬儀自体は、一連の複雑な儀礼から構成されるが、最も華やかで喧噪にあふれるのは、火葬場への行列である。動物の形をした火葬棺を先頭に、頭上にさまざまな供物を載せた女性たち、バデという遺体を載せた塔状の輿が続き、ガムランの楽団が最後尾をつとめる。バデはジグザグに動き回り、決してまっすぐには進まない。これは靈魂が家に帰ろうとしても迷って帰れないようにするためだとされる。そして浜辺に到着すると、火葬棺に遺体や遺骨を移し、聖水をかけ、供物をいれてから焼かれる。遺灰は、ココナツの容器に入れて最後に海に捨てられる(写真4、映像3)。

バリの火葬儀礼を最も特徴づけるのは、火葬に曳きだされるバデ(bade)という火葬塔(写真5)と、さまざまな動物の形をした火葬棺(写真6)である。火葬塔バデは、遺体または遺骨を火葬場まで運ぶための輿で、金紙や色紙、色布で華麗に飾られ、上に行くほど小さくなる幾重にも重なる屋根が高くつきでている。これはメルと呼ばれる寺院の屋根と同じもので、奇数と決まっているその数は天界での位階を表し、カーストや社会的地位によって規定されている。スードラは1層、王族や貴族は3層から11層までとされる。

バデの構造は、バリの世界観を反映している。基層

部には、亀の頭部の彫像が飛びだし、2匹の竜（ナーガ）がバデの回りに絡みつく。これらは、地下界に住む亀ブダワン・ナラと、バスキとアナンタボガの2匹の竜で、伝説ではバリ島を支えているとされる。この上にググスンガンと呼ばれる山がある。その上に、バレ・バレアンという遺体を納める家屋（バレ）が載る。先端部の天界と地上界との境界に相当し、靈魂がこれから天界に赴くことを示している。火葬棺の形（動物）もカーストによって厳格に決められている。王族や貴族は牛が使われ、サトリヤにはシंगाという有翼の獅子と決められ、スードラには空想の動物や鹿などと決められている。

火葬儀礼は家や親族組織だけではなく、バンジャールなどの地域共同体も参画する点で、バリの世界観が現実的な規範性をともなって、広範な社会性をもっているといえる。ここでも聖水が聖的な基幹的象徴としてさまざまな場面に登場し、重要な役割を果たしている。

第4章 祭礼の基本構造

バリではさまざまな種類の儀礼がおこなわれているが、観察をしていると、以下のようなある種の共通の過程を見つげることができる。



写真7. チャナン・サリ



写真8. 毎日供物を供える

(1) 浄化—最初の段階で、儀礼の場所、道具など儀礼に関するものが浄化される。

(2) 供犠—供犠がおこなわれる。また供物の「エッセンス」（サリ sari）が神々に送られる。

(3) 聖水—供物を捧げ終わると、参加者には聖水がふりかけられる。そして祈りを捧げる。

(4) 聖水の授与—その返礼として、聖水が与えられる。

この枠組みは、毎日、家や商店の前などでおこなわれている供物をパドマサナや地下の悪霊に供えるささやかな儀礼にも見られる。そこでは、供物のエッセンスとしてチャナン・サリが供えられる。（写真7、写真8）

バリの人びとにとって、行事や儀礼に参加する最大の目的は、この聖水にある。したがって、司祭が主宰する祈祷や儀式自体は彼らの関心外である。バリの宗教が「アガマ・ティルタ (Agama Tirtha)」、聖水の宗教と呼ばれる所以でもある。バリのほとんどの儀礼は、司祭による祈祷と聖水の授与が基本で、聖水は儀礼にとどまらず、日常生活のあらゆる側面でとくに重要視される。

芸能や舞踊などは、神々を慰撫するためのものであり、実際に観客もいないまま演じられる芸能も存在する。その意味で、バリの祭礼で強調される演劇的な側面は、バリの人びとにとって最も重要であるとはいえない。これらの祭礼や儀礼の根底にあるのは、浄/不浄、聖/俗、神/悪霊、天/地、山/海などの二元論的な対立と、それを止揚し、調和、均衡をもたらそうとする志向性、感覚であり、どちらか一方に偏するのではなく、必ず両者の均衡が希求される。

これらの成果を踏まえた今後の課題として、アジア的な祭礼（祝祭）の構成原理、変容と偏差、類縁性に加えて、コスモロジー、自然観などとのつながりを明らかにしていく。また、急速に変化する現代のアジア世界のなかで各地の祭礼（祝祭）の果たす社会的役割を見直し、地域的伝統の再生と再創造へのデザイン的方法論の開発を目指したい。